

福祉のひろば

特集

福島、陸前高田、そして久慈 東日本大震災から3年

5

2014

ひろばトーク

イラクの子どもを救う会代表・
フリージャーナリスト

にしたに ふみかず
西谷 文和さん

アフガニスタンに日本の平和憲法を輸出できれば……

編集 総合社会福祉研究所

住む人・使う人が主人公！

私たちは住む人・使う人の
立場に立って設計しています。
お気軽にご相談下さい。

京都建築事務所

〒 604-8083

京都市中京区三条柳馬場東入中之町10

代表取締役社長 川下 晃正

TEL (075) 211-7277

FAX (075) 211-7270

<http://www.kyoto-archi.co.jp/>

〒601-8382

京都市南区吉祥院石原上川原町21
<http://www.creates-k.co.jp>

クリエイツかもがわ

TEL 075 (661) 5741

FAX 075 (693) 6605

送料何冊でも240円

玄景華◆監修 栗木みゆき◆著
1400円＋税
口の構造や病気の基礎知識から、障害への対応、口腔マッソーシ
をイラストと写真をあわせてわかりやすく解説。

障害のある人たちの 口腔のケア



●お口のケアは健康につながる
障害のある人たちの

2000円＋税
NPO法人医療的ケアネット●編

医療的ケア児者の 地域生活支援の行方

医療的ケアの原点と
制度、超重症児者の
地域・在宅支援、学校
の医療的ケア、ケア
ホームなど、法制化
の検証と課題を明ら
かにする。

生きる
在宅・地域で
支える

●ひろがる地域格差の
平準化をめざして…

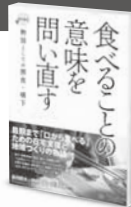
横無尽に語る！

多職種連携で「生涯安心して、おいしく、食べられる地域づくり」
「摂食・嚥下ネットワーク」のすぐれた事例紹介！
医療の急速な進歩と「摂食・嚥下」のあゆみとこれか
ら「嚥下の謎解き」・臨床と学問の間をテーマに縦
横無尽に語る！

新田國夫・戸原 玄・矢澤正人◆著

2200円＋税

食べることの 意味を問い直す 物語としての摂食・嚥下

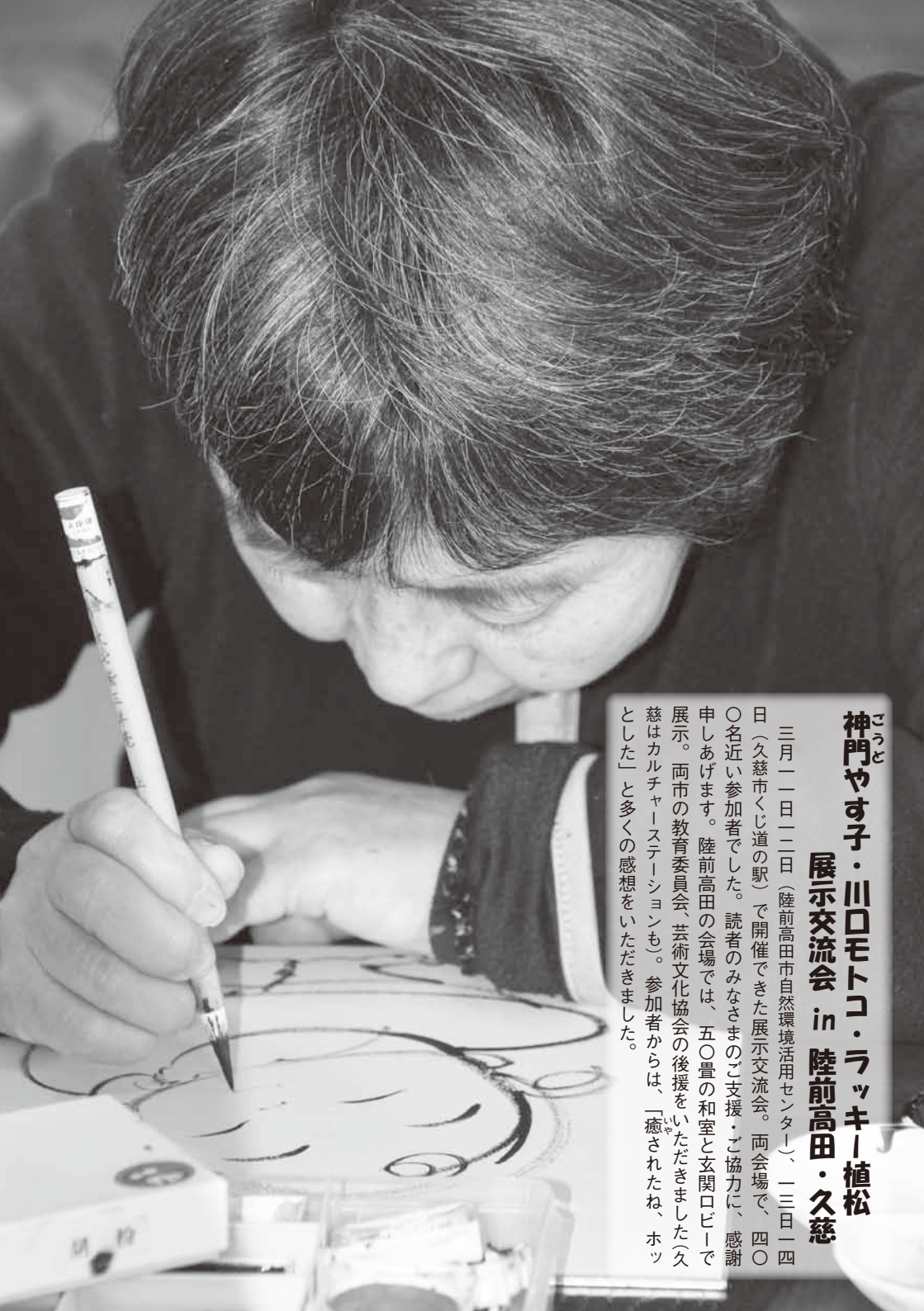


●食べる意味を通して、高齢社会の医療のあり方を、
地域の実践を通して考える――

ごうと
神門やす子・川口モトコ・ラッキー植松

展示交流会 in 陸前高田・久慈

三月一日・二日（陸前高田市自然環境活用センター）、一日・四日（久慈市くじ道の駅）で開催できた展示交流会。両会場で、四〇〇名近い参加者でした。読者のみなさまのご支援・ご協力に、感謝申しあげます。陸前高田の会場では、五〇畳の和室と玄関ロビーで展示。両市の教育委員会、芸術文化協会の後援をいただきました（久慈はカルチャーステーションも）。参加者からは、「癒されたね、ホッとした」と多くの感想をいただきました。





陸前高田市の開催は11日12日。11日午後2時46分、会場でサイレンの響く中、黙とうをしました。陸前高田への津波の第一波は、午後3時23分でした。写真上は、参加者に作品を紹介する神門さん（手前）です。下の写真は、久慈の会場で、長内学童保育所・わんぱくクラブの子どもたちが参加。さっそく、「となりのおっさん」（語り）と「ねずみのすもう」（人形劇）を神門さんが公演。「さすが、プロだね」とスタッフ一同感心しきり。



一八歳から三三歳まで劇団京芸で過ごし、その後も人形劇の活動をされている神門さん。スイッチが入ると大変身です。人形劇の「ねずみのすもも」は、今回の公演や人々との触れ合いで、変わったと感想を述べられました。「となりのおっさん」は自作です。



参加された方々に、絵はがきのプレゼント。宿に戻っても作成、展示会の合間にも筆をとる。その姿を参加者が目にし、すごいなあ！ かわいいなあ！ と感嘆。今回の展示交流会は、豊田八郎さん（総合社会福祉研究所常任理事）、浅井純二さん（ボランティア・日本福祉大学）、神門やす子さん、編集主幹、現地では、菅野悦雄さん（^{かんのえつお}陸前高田市）、城内仲悦さん（^{じょうないちゅうえつ}久慈市）のスタッフで行われました。お疲れさまでした。

（写真・コメント 下野祇園）

【ひろばトーク】

アフガニスタンに日本の平和憲法を輸出できれば…… 西谷 文和 6

福祉のひろば

2014年5月号

●特集● 福島、陸前高田、そして久慈——東日本大震災から3年

福島、陸前高田、そして久慈	8
展示交流会編（3月11日～14日）	13
久慈市★福祉のひろば読者との交流会	22
【現地レポート】震災3年、震災の教訓から何を学ぶか	
米澤 敦子	26
展示交流会・視察に参加して	29

●トピックス●

おびやかされる子どもの権利	尾道 敦子 38
〈鼎談〉連載 小川政亮 執筆 自伝 を終えて（後半）	44
小川政亮・井上英夫・垣内国光	
30年ぶりに釜ヶ崎へー釜ヶ崎のまち短期留学ー	武尾 正信 52

●連載●

フォーラム

子どもはちいさい肩に生活を背負って	上野 さと子 56
あれから3年……釜石・東日本大震災を記録する会代表	
二、避難所入り口にあふれる「たすね人」のはり紙	

相談室の窓から なの花作業所（1）	青木 道忠 60
わらじ医者 早川一光の「よろず診療所日誌」	早川 一光 62
育つ風景 狭くてちいさな庭	清水 玲子 64
いっぽいっぽの挑戦（14）	

「生存権」の重さを感じながら	繁澤 多美 66
映画案内 『運命の人』	吉村 英夫 68
現代の貧困を訪ねて	生田 武志 70

公立中学の制服代が払えない！	
なにわ銭湯見聞録（拾参）	ラッキー植松 72
いただきます！	東桃谷幼児の園 74

白ごはんがすすむ！ サワラのごまみそ焼き	
ホームレスから日本を見れば	ありむら潜 76
花咲け！男やもめ	川口モトコ 77

みんなのポスト 54／今月の本棚 53／福祉の動き 78

●グラビア● 神門やす子・川口モトコ・ラッキー植松
展示交流会 in 陸前高田・久慈

●表紙の絵● 神門やす子



●カット● 川本 浩

アフガニスタンに日本の 平和憲法を輸出できれば……

イラクの子どもを救う会代表・
フリージャーナリスト

にしたに
西谷

ふみかず
文和さん

「学校に行くの、やめたの」「なんで?」「ごじめられるかい」

アフガニスタンの難民キャンプで出会ったゴルジュマちゃんは、カメラの前で恥ずかしそうにつぶやいた。彼女の左腕は米軍の空爆によって、肩の部分からそぎ落とされている。片腕がないのでいじめられているようだ。子どもは時として残酷である。自分たちと違う対象を見つけたとき、それを受け入れず、はじき出してしまいう場合もある。

「じゃあ、普段はどうしてるの?」「家にいる」「今一番ほしいものは何?」「左腕。両手があれば学校に行ける」「一番大事なものはどっち? 友達、それとも食料?」「食べ物。おながすいているもの」。

米軍の空爆で片腕をなくしたのだから、本来彼女は同情されるべき存在のはずだが、ここはアフガニスタンである。片手では洗濯や炊事が普通にできないので、今後彼女は、家の中でさえも「お荷物扱い」されるのかもしれない。

私はゴルジュマの父親ワキールに、ちよつと意地悪な質問を試してみた。

「君たちの村を空爆した米軍の責任者、大統領の名前を知っている?」「知っていると、オバマだろ」「新聞でその名前を知ったのか?」「いや、人々が話をしているのを聞いた」。

やはりワキールは文盲だった。おそらくこのキャンプで暮らす人々の相当数は文字が読めない。



にしたに ふみかず

大阪府吹田市役所を退職後、フリージャーナリストとなる。9・11以降イラクとアフガンを精力的に取材し、2003年12月に「イラクの子どもを救う会」を設立。2006年度「平和協同ジャーナリスト基金賞」受賞。「中東革命」や「アラブの春」の実相にも迫る。

著書に「報道されなかったイラク戦争」「オバマの戦争」（ともにせせらぎ出版）、「戦火の子どもたちに学んだこと～アフガン、イラク、福島までの取材ノート～」（かもがわ出版）などがある。毎日新聞月曜日夕刊で「西谷流地球の歩き方」を連載中。

憲法九条の精神で外交決着

米国は「この程度の人々」に恐怖をいただき、空爆をつづけている。軍事作戦をねる、ロケット弾を撃ちこむ……。こうしたことは説明書、企画書が読めないといけない。大統領の名前をかるうじて知っている人々を、「テロリストかもしれない」と空爆し、一〇名の家族を殺害し、娘の片腕をうばっていく。いったい「テロとの戦い」って何だろうか？ 米国とアフガニスタンに日本の平和憲法を輸出できれば、と思う。

「日本国民は、正義と秩序を基調とする国際平和を誠実に希求し、国権の発動たる戦争と、武力による威嚇又は武力の行使は、国際紛争を解決する手段としては、永久にこれを放棄する」。

九・一一事件直後、人々がパニックになっている状況の中でアフガン戦争が引き起こされた。もし、憲法九条の精神で外交決着をめざしていたら？ ワキールは家を焼かれずにすんだし、娘は地元の小学校に通えているはずだ。学校に通えていれば、文字の読み書きができるようになる。そうなれば新聞が読めるので、米軍の空爆がいかにひどいか、タリバンの自爆テロの巻き添えで殺される人が多数出ていることを知る。つまり米軍の空爆も、タリバンの自爆もイヤだという国民世論が形成されていく。

毎日飢えずに食べられること。寒い冬も暖かい衣服があること。そして、学校があつて勉強できること。日本ではあたり前のことが、あたり前でない子どもたちがいることを、私たちは忘れてはならない。

特集 福島、陸前高田、そして久慈 東日本大震災から3年

今年三月一日一四時四六分、陸前高田市自然環境活用センターにて、菅野悦雄さん（陸前高田市）、神門康子さん（宇治市、書画家）、豊田八郎さん（奥州市、当研究所常任理事）、浅井純二さん（犬山市、日本福祉大学助教）、黒田孝彦（編集主幹）は、長いサイレンのもと黙とうをしていました。

宮城県側では六メートルの津波警報、岩手県では三メートルの津波警報。陸前高田に一五時三三分、津波が到達します。この警報の違いが大きな岐路になったと、あとでわかります。陸前高田市の震災死亡者一五五六人、関連死四三人、行方不明者二一五人（うち死亡届受理件数二〇九人）、家屋倒壊数四〇四五棟（二月二八日現在岩手県総合防災室まとめより）。九日に行われた陸前高田市主催の追悼会で、戸羽

太市長は、「志半ばで亡くなった方々を思うとき、万感胸に迫るものを禁じえない。底知れぬ悲しみや寂しさ、ぶつけようのないくやしさを味わった。……いまだ整理できない気持ちを思うとき、まちなみや産業だけでなく、心の復興こそが真の復興」と式辞で述べています。

震災三年を社会福祉の問題として考える

震災三年を総合社会福祉研究所（以下、研究所）としてどのようにむかえるか。昨年夏の会員の集いで、理事会と福祉のひろば全国編集委員会を被災地で開催し、地元との交流の中から、被災地の生活や社会問題などをふれ合って考えることにしました。

そして、福祉のひろば連載者の神門やす子さん（表紙絵）、川口モトコさん（花咲け！ 男やもめ）、ラッキー植松さん（なにわ銭湯見聞録）の三名の協力のもとで、岩手県陸前高田市と久慈市で展示交流会を開催することになりました。